
略奪者は魔法使いと共に

夜弧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

略奪者は魔法使いと共に

【Nコード】

N8221X

【作者名】

夜弧

【あらすじ】

此処は魔法世界【ヴァルプルギス】

その世界に転移した少年とそれを見つけた魔法使いの奇妙な共同生活

始まりは唐突に（前書き）

初めまして、夜弧です

この小説を読んでくれて本当にありがとうございます

始まりは唐突に

スーパーの特売日、朝早くから店の前に並んでいたのに知らない場所にいる

こんなのはフィクションの話だ

どれだけ現実に嫌気がさしても、どれだけ魔法等にあこがれを抱いたとしても……叶うことが無いと分かっているから皆憧れるんだ
だからこんな事が起きる筈がない。いや、起きてはいけない。それが一番だろ？

だからさ、俺はこの状況が全く理解できないし認めるつもりもない

こんな、スーパーの前にいたのに気が付きたら木に囲まれてるとか……そんなの認めてたまるか！

彼との出会いは唐突に

此処は魔法世界「グリモワール」にある小さな森だ

その森は極稀に異世界への扉が開く事がある。その時に異世界から色々な物が送られてくる事がある。それを求める者も多く、この森には常に人が絶えない

この日も、もちろん多くの者が来ていた。その中の一人、アルカード・リオンハートが世界で初めて物以外が送られる所を目撃することになる

■ ■ ■ ■ ■

今日は良い物がない

拾った物は力チ力チと音のする文字盤の付いた腕輪、透明でふにやふにやなひょうたん、不思議な材料で作られたバック、最後に至ってはバカデカイ鉄の箱に車輪を付けた物だ

「はぁ……今日はもう帰ろっかな？」

そんな事を考えていた時だった。木々の間から蒼白い光が漏れたのは……

「なつ——？！　今はゲート光？！　しかもあの光はレア物確定時！」

ならゲートのある場所には誰が見てもレアだと分かる物が送られてくる筈だ。例えば投げた後手元に戻ってくる槍とか、時間を遡れる時計とか！

絶対手に入りたい。そう思い彼女は光の漏れる方向に走り出す。自分の為にも国の為にも……

そして数分程走った場所に、ゲートを発見する

幸い周りには誰もおらず、見付けたのは自分だけらしい

「早く出て、早く……」

その想いが通じたのか、ゲートはあちらとこちらの世界を繋ぎ、向こうから何かを持ってきた

そしてゲートが閉まると……いきなり背の高い男が現れた

「……え？」

流石にコレは予想していなかった。というか出来る筈がない。今まで一度も、生物が『生きて』ゲートを潜り抜けた事はないのだ

「#、×　ペ＊」

「は？」

今あの男はなんと言ったんだろう？

「^み、^てく？！」

「ってこっちに来てる？！」

ど、どうすればいい？ 逃げれる場所も隠れる場所も沢山あるけど、何処に行けばいいのかわからない！

でもそんな事を考えてる間にも男はくる訳で……パニックになった私は

「イ、イヤアアアア！！」

「こくぽ？！」

何故か悲鳴を上げながら男の右脇腹を蹴り上げた
そして蹴り飛ばしたのを後悔しながら、不謹慎ながらこう思った

悲鳴は普通に聞こえるんだ……って

振り回される魔法使いと振り回す女王

彼を保護（？）した後、一度女王に会いに行くことにする

ちなみに、【森】（正式名称は長い為【森】と呼ばれる）で見つけた物（いや物ではないが）は報告する義務があるため、彼を見付けなかったとしても城に向かわなければならぬ

「はあ……毎回報告する必要あるのか？」

そう思いながら、私は彼女の部屋に転移した

■ ■ ■ ■ ■

此処は魔法の国【ヴァルプルギス】。魔法を扱う者達が集まり出来た国だ

此処には階級があり、下から【魔術師】【魔女】【魔法使い】【女王】

ちなみに【女王】以外の階級は、使える魔法の種類によって変わってくる。分かりやすく言うなら【魔術師】は錬金術や占いが出来る者、【魔女】は魔術師の資格に加え、魔女術や占星術を使える者、【魔法使い】は魔女の資格に加え、攻撃用の魔法を最低でも5種類以上持っている者だ

魔女までなら努力で慣れる者もいるが、魔法使いとなると努力だけでは絶対に慣れない。何故なら魔法の難易度が違い過ぎるからだ。

そも攻撃魔法は書物などには基本的には載っておらず、オリジナルが使われる事が多い。オリジナルの魔法と言うのは確かな理論と発動させれるだけの精密な魔力操作が必要だ。普通の者はまず理論で挫け、そこをクリア出来ても自らの技量に絶望する。そんな魔法を5つはもたなければならぬ魔法使いは数が少ない

そんな狭き門を通ることが出来る者は少ない。だが、アルカードはたった17歳で魔法使いの称号を手にした。いわゆる天才だ
そんなエリート中のエリートの彼女だが……普段は普通の女の子
な訳で

「うぐう……限定プリンが、一日50個しか販売されない激レアプリンが」

大事なオヤツを取られたら流石に落ち込んだりする

「ちゃんと時間までに帰って来ればこんな事にならなかったのよ」
「食べた張本人が言わないで！ だいたい私は時間通りに来た筈だ！」

アルカードの目の前にいる人物はラビュリント・ヘクセン
現女王にして国一番の問題人物でもある

女王になる前からの友人であるアルカードは振り回されてばかりだ

「私が言ってるのは私が決めた時間よ？」
「理不尽だ！」

「まあそれはそうと、彼の事なんだけど……… とういう風に対応したらいいと思う？」

急に真面目な話を振られ、前の話がうやむやになったのに少し釈然としないままアルカードは答えた

「そうだな。一番いいのは誰にも気付かれない内に存在を消す事だろう。今は誰もあの男の言語を理解出来ないが、いつか出来る者が現れる可能性がある。その場合、彼の知識がこの世界にどのような影響を及ぼすか分からない。だから私とリン以外彼を知らない内に消してしまうのが最良だと言わせてもらう」

「いや、消すとか無しの方向で考えて。というかアル、そんな女の子が言っている言葉じゃないわ」

「わ、私だってこんな事言いたくない！　だが、彼がこの世界に来た事を知る者が増えればどんな事が起こるか分からないんだぞ！」

机を叩き付け、ラビュリントを睨み付ける

だがラビュリントはその視線を受け流している。まるでどこ吹く風だ

「もし彼が大した事を知らなかったとしても、それを確認するにはまず彼を確保する必要がある。そうなったら、最悪の場合戦争に発展する可能性すらある事くらいリンも解ってるだろう？！」

「怒鳴らなくても解るわよ。彼の知識は国の利益に繋がる可能性がある事も、それが他国にとっても喉から手が出るくらいに欲しい物だって事も」

そこまで解っていてこの友人は彼を生きたままどうにかするつもりなのか？ いや、するつもりなのだろう。昔から何かを得る為に何かを捨てるという行為を一度もしなかったのだから

「はあ……ならリンはどうするつもりなんだ？」

「まだ分からないわ。だってこんなの初めてなんだもの」

……頭が痛くなってきたが、今は冷静に考える時だろう
そして、冷静に考えた結果、ある事を思い出した。そう、彼を寝かした場所だ。そしてその場所にある【本】を思い出し、背筋が寒くなる

「リン、確かさっき彼を運んだ時、この部屋の書庫にあるベッドに寝かしたな？」

「ええ、あそこは防音だから静かに寝れると思って」

彼女の言葉を聞き、嫌な予感が強くなっていく

防音……つまりあちらでどんな事が起こっていてもこちらには聞こえないという事だ

「な、なあ。もし彼が今起きているとしよう。書庫には大量の【禁書】が保管してある。もし本が好きな者だとしたら、目の前にある本をとりあえず手に取ってみよう……とか思ったりするの？」

「さ、さあ？ 私は好きだから手に取るけど？ あそこにある禁書は全部第一級封印指定の魔導書ばかりだから……間違って本を開い

たら」

リンの顔がみるみるひきつつていく。おそらく私も似たような顔をしているのだろう

「と、とりあえず中を確認しないか？」

「賛成。もし読んでたら攻撃魔法乱射してね？」

そういい、2人で扉を開けようとした瞬間、目の前の扉が水に呑み込まれた。そして水が小さくなると同時に扉も小さくなり、そして最後は水と一緒に消えてしまった

「つて、はあ?!」

『どうです？ 結構凄いでしょ』

そして、扉が消えた向こうから2冊の本を持った少年が歩いて来た

魔道書は俺をマスターと呼んだ

ふと目が覚めると、何故か書庫にいた

「あ、あれ？ 俺はさっきまで木に囲まれてた筈だ。それが何故書庫にワープした？ いやそもそも俺は学校の帰り道のスーパーにいた筈だ。何故だ？」

数分真剣に悩んだ結果、理解出来ないという結論に達した

まあ分からない事は分からないままでも良い

とりあえず、今一番大事なのは食事だ

スーパーにいた時点でもう6時を回ってた訳で、腹が自己主張しまくっているのだ。栄養ブリース、と

「でも食える物ないしな……ああ、お腹空いた」

流石に本は食えんし、出来ればこの部屋に食べ物あれば嬉しいな

そう思い奥に向かい、冷蔵庫がないか探してみる

まあポテチくらいならあるだろう

で、書庫の中、食料を探し回って15分（体感だが）

「ポテチすらねえ……」

しかも延々と本棚が続いてる。体感とはいえ15分間真っ直ぐに進んだのにコレは異常だ

だから俺は分かったのかもしれない。ここが何処なのか、ついでに俺に何が起きたのか

そう答えは簡単だったんだ。いきなり森にワープする、そして次は記憶が飛んでこの場所にいつの間にか来てた。そして歩いてても歩いても延々と続く本棚……そう、つまり此処は

「俺が見てる夢の中に違いない！」

そう、夢以外にありえない。ファンタジーは実在しないからファンタジーなのだ

そして本物の俺は部屋で爆睡しているのだろう。そしてスーパーに行ったのも夢だろう。その証拠にさっきまで腹が減っていたが、夢だと思っただ瞬間気にならなくなっている

そんな事を考えている時だった。不意に誰かに呼ばれた気がしたそれもすぐ近くから

「この本棚から聞こえた？」

気になり少し調べてみると2冊の本だけ妙に気になった。黒の表紙に金の刺繍が施された古い本と、真紅の表紙に何の刺繍もされていないまだ新しい本だ

「ラオプ【Raub】？ 確かドイツ語で略奪って意味だっけ？ こつちドクメントは【Dokument】……記録？」

どのような内容の本なんだろうか？ 少し、いやかなり読みたいその気持ちに負け、俺は黒の本を開けた

「……何語？」

表紙を見てドイツ語かと思ったが、全く知らない言語だ。理解出来そうもない

少し残念だが読めないのならしょうがない。元の場所に戻すとするか

『……！ ……ッ！』

「ん？ また聞こえた？」

『と……！ ……け、た！』

「とけた？」

俺がそう呟いた瞬間、いきなり持っていた本が開き、中からペン

とカードが出てきた

カードには『←（ここ）に貴方の名前を書いて』と書いてあった
なので、特に何も考えずに竜宮虎治と書いた

『契約書のサインを確認中……終了しました。竜宮虎治をこれより
マスターとして認識します。今この時から私の知識は全てマスター
の物となり、マスターの知識は全て私の知識となります。あらかじ
めご了承ください』

「はい？」

『なお、この契約はクーリングオフ制度はないので切る事が出来ま
せん』

「え、何その悪徳商業みたいな契約？　というか契約？」

『契約は契約です。私は貴方に知識と力を貸し、貴方は私に魔力を
渡す。ただそれだけの話です。さあ、もう質問は無いですよ。無
いに決まってます。あるなんて変です。あるなんて言わせない』

「あれ、途中から確認じゃなくて確定と脅しになってるような？」

夢とはいえ流石にはっちゃんけ過ぎてはいないだろうか？

……いや、そもそも本なんて目次すらまともに読んだことないし、
ゲームに至ってはやったことがない。なのにこんな夢を見れるのか？

『という訳でマスター、私の力を使ってみましょう！』

「え、いや待っ」

『使ってみましょう！　という事で、まずは72ページを開いてく
ださい。翻訳はしたので読める筈です。さあ、そこにある呪文を唱
え、適当な場所に指を向けてください』

さっきまでなら多分すぐにやったのだろう。だけど、抱いた疑問のせいで少し躊躇ちゅうちうしてしまう

だが、結局の所……好奇心に勝てる物はない

『どうしましたマスター？』

「いや、何でもない。えっと……あれ？ 文字が読めるようになってる？ とうかコレはドイツ語じゃにか？」

『さっき言いました。もう忘れたんですか？ 馬鹿なんですか？ 死ぬんですか？』

……何で本にそこまで言われねばならないのだろうか？

『早く書いてある事を読んでください』

「……Rusalka, Prinz von Ihnenbattum Vergabung. (ルサルカ、貴方の王子は許しを求めた) Lassen Sie uns Work It in. So hinterlassen Sie eine stärke, stark. . . . (離れないように強く、強く……)」

唱える終わると目の前に小さな水球が出来た。コレは……なんなのだろうか？

『ささ、適当にあっちの扉にぶち当てましょう』

「こ、こっか？」

指を扉に向けると、水球はゆっくりと前進した。扉に当たると急に膨張し、扉を呑みこんだ

「……これなんなの？」

『見てれば分かりますよ』

本の言うとおり、すぐに変化が起きた
水球が呑み込んだ扉ごと徐々に小さくなり、最後はまるで蒸発したかのように消えしまったのだ

「つて、はあ?!」

『どうです？ なかなか凄いでしょっ』

そっいつ問題じゃねえよ馬鹿本！

3対1は卑怯だ

彼の手に持っている魔導書は禁書の中でも最悪と評される【略奪の魔導書】

かつて3日で国を滅ぼした魔法使いが使用した魔法が記してある【攻撃魔法特化】の禁書だ

あの本に書いてある魔法は一つだけ

戦闘をし、勝てば相手の技能や魔法、魔力、才能、身体能力、記憶、生態を根こそぎ奪い取る魔法【略奪】

奪い取った物は全て魔導書と使用者が得て、もし使用者が何らかの拍子にいなくなっても次の使用者に引き継ぎが出来るという能力まで持っている真正銘最悪の魔導書だ

「今すぐその本を放しなさい！ 放さない場合は拘束させてもらいます！」

言葉が伝わらない事は分かっているが、一応警告はしておく

「……なあ、何でコイツ放さないと拘束されるんだ？」

「……え？」

今、会話した？

あれ、前声を聞いた時は全然分からなかったのに……

「……なあ、とりあえず説明しろ。えっと、喋る本」

『この方が【異次元干渉型転送魔法円『ルルハリルの森』】にいたマスターを蹴りにて気絶させ、拉致監禁をした犯罪者です』

「なっ、違……」

……いや、よく考えると、ある意味間違いではないような？

確かに蹴りで気絶させたし、無断で転移してこの部屋に閉じ込めたのは確かな訳で？

いや、それどころか自分達の都合で消そうとか言ってたよね？

……ダメだ。冷静に考えたら誘拐犯以上に最低だと判断してしまう！

「ちがつ？」

「……わないような、でも違うような」

ああ、目が勝手に泳いでしまう

「……くっ、とにかくその本は返していただきます！」

「誤魔化したな」

「誤魔化したわね」

『誤魔化しましたね。プッ』

「う、うるさいッ！」

自分でも分かっているから皆して責めなくてもいいだろう！

『ついでに言うなら、私はマスターと契約したのでマスターの私物

かと』

「確かにそうね」

「リ、リン?! 貴女はどちらの味方だ?!」

「現段階では誰の味方でもないわ」

ああ、本当にこの女は……!

「そもそも、アルが連れて来たんだから彼が何かしたらアルの責任になるのよ?」

「うぐっ……!」

本当はかなり痛い所を突いて来るなこの女は……!

「あのさ、俺が中心なのに蚊帳の外にいる気がするんだけど?」

『間違いなく蚊帳の外ですよマスター』

「あら、寂しかったんですか?」

「はっ……?! そ、そうです! 貴方の話だったのに何故私が追い詰められてるんですか?!」

「墓穴掘り過ぎなだけじゃないか?」

彼の指摘は正確だ

だがそれを納得出来るかどうかは別の問題だ

「ほ、掘ってません! 貴方達が、その、……さ、先回りして落と

し穴を作っているだけです！」

「アル、罨は引つ掛かる方も悪いのよ？」

「屁理屈だ！」

「さっきの言い訳よりはマシだと思うけどな。というか、落とし穴
って……くっ」

「わ、笑うな！」

この男、性格悪いにも程がある！

リンもリンだ。私を少しくらい庇ってくれても良いじゃないか！

「あら、もしかしてアル泣いちゃった？」

「な、泣いてなんかいない！」

「え、ちよつ、泣くな。マジで悪かったから泣くなって！」

「だから泣いてな、ぐすつ、ない！」

『いや、マスター最低ですね』

「お、俺だけのせいだよ？！ お前とこの姉ちゃんも一緒にやっ
ただろ？！」

彼がそう言つと、リンはゆっくりと頭を降つた

「私は友達だから良いのよ」

『私の罪は全てマスターの罪です』

「いや、友達苛めるのもどうなんだ？ あとその本は後で焚き火
にしてやるから覚悟しろ」

彼に激しく同意する。リンは私を苛め過ぎだと思う

あと、その本を燃やすくらいなら返してください

「燃やすのはダメよ」

『流石リンさん、常識的な答えです!』

「それ特殊なインク使ってるから煙が毒になるの」

『え、焚書反対じゃなくてそういう理由?』

「なるほど、殺してもただでは死なないとかマジで最悪だな」

『あれ? 今度は私の番ですか? 私Mじゃないから苛められると目からインク出ますよ?』

「目とかないだろ」

何故かだんだん漫才のようなやり取りに変わっていく

まあ、リンがいる時点で諦めてた。更に一人と一冊がアレではグダグダになる一方だ

そして本が2人に苛められている最中だった
物凄く力の抜ける音が――

「今の誰?」

『私ではないですよ』

「俺でもないな」

「……ごめんなさい。私です」

――私のお腹から鳴り響いたのは

恥ずかしくて顔を上げる事すら出来ない

くっ、コレもリンが私のお菓子（プリン含む）を全部食べたせいだ！

「……あ、うん。なんか疲れたし飯にしない？」

「そうね。なんだか飽きちゃった」

『大きな音でしたね』

うう、何で今日に限ってこんな事ばかりなんだ！

理不尽な事で軽くピンチになりました

さて、前回腹を空かした奴がいたので（何故か）俺も含めて食事にする事になったんだが……

「ば、馬鹿な……！」

「どうしたんですか？ 食べないならもらいますよ？」

「好き嫌いはダメよ？ アルも人の分は食べようとしない。はしたないわ」

「貴女が言っな、貴女が！」

隣で腹ペコ女と天然ドSが騒いでいる

しかし、今の俺にとってはかなりどうでもいい

「おい」

「だいたいリンはいつもわた……」

「アル、呼ばれてるわよ？」

「ですから貴女は、って何ですか？ 今大事な話をしているんですか？」

「…… 此処にはまともな食事はないのか？」

俺の一言に凍り付く2人

片方に至っては瞳に憤怒の炎を灯している

「二、これ程立派な食事の何処に文句があると言つんですか?!」

そう言つて食卓に並んでいる物に指を指して説明してくる

「このショートケーキは甘さ控えめ、スポンジは冷めてもフワフワで、大人気なんですよ?! ああのイチゴタルトだって彼の有名店「エアトベール」の一日30個の限定品! 貴方の前にあるマロングラッセに至つては」

「そついう事を言つてゐるんじゃないよ!」

そつ、論点が違い過ぎる

この女が言っているのは【目の前の物がどれだけ素晴らしいか】
だが俺が言っているのは――

「何でお菓子しかないんだよ?!」

――【どうして食事なのに菓子しかないのか】である

「なんだアレか?! 『ご飯がないならお菓子を食えばいいじゃない?』つてヤツか?!」

「美味しければいいじゃないですか?!」

「馬鹿だろ?! 本気で馬鹿だろ?! お前勉強出来るけど頭悪いタイプの馬鹿だろ?!」

「そ、そんなに馬鹿馬鹿言っな！ 馬鹿って言った方が馬鹿だ！」

周りを無視してヒートアップしていく2人

たかがこれだけの事でヒートアップ出来るのは似た者同士だからじゃないの？ というのがラビュリントの意見だが……面白いし巻き込まれたくないので黙って観察する事にする

「何ですかオヤツは3時って？！ 5歳児じゃないんですよ？！」
「飯として出すなって言ってるんだよ！ そもそも毎食こんな高カロリーな物食ってたら体に悪いし何より太るわッ！！」

彼の何気無い一言にあった禁句^{タブー}

それは傍観していたラビュリントも見過ごせない最悪の言葉

「ふとッ？！ ……今のは許せません」

「そうね。許せないわ」

「俺は当たり前な事を言っただけだぞ？」

彼の言葉を聞きながら小さく呪文を唱える

「Answer de brilliance answer）
輝きの槍を此処に）」

「Seo anchumhacht cneasaith e a

n s c r i o s t a a g u s (破壊と癒しの力を此処に) .
「って、洒落にならねえ物出すな?!」

いきなり二人の手に現れたのは光り輝く槍と馬鹿でかい棍棒
槍の方は穂先が五つに分かれている。もし刺さったら痛いじゃ絶対
に済まないだろう

棍棒は本当に馬鹿でかい上に8個の鋭い突起があり、殴られたら
肉団子確定だ

『マスター、あの二つの武器なんですけど』

「知ってるのか?!」

『ええ、残念な事に。人工遺物アーティファクトと呼ばれる特殊なマジックアイテム
です』

つまり、あれも魔法で作られた物って事か

『しかもあの二つ、かなりヤバい物ですよ。主が最初にいた森、覚えてます? そこで見つかった数冊の書物から形状と能力をパクって作った物です。確か『レカンの黄書』『侵略の書』って本のはずです。主知ってます?』

「知る訳ねえだろ!」

『はあ、無知で無能で学もない主にしようがないので説明してあげます』

コイツマジで燃やしたろうか

一瞬本気でそう思ったが今は話を聞いておいた方がいいだろう

『という訳で、説明してあげるから土下座して「ああ、あらゆる世界で一番美しい装飾のされた略奪の魔導書様、この哀れな男に知識

を「ご教授お願いします」と言ってください」

「ああ、世界で一番みすばらしくウザ過ぎる略奪の魔道書様、さつさと教えないとマジで燃やして灰にすんぞコラ？」

「ははは、冗談ですよ？ やめてくださいね？ マスター、冗談って分かります？」

何が冗談だ。さっきのはマジで本気だっただろ

『まあともかく、この二つの書物はケルト神話と呼ばれる物に関する書物だそうです。で、それを解読した魔法使いが錬金術と魔女術、攻撃魔法に補助魔法と、色々混ぜて出来たのがあの二つでして……槍の方は投げると確実に当たる上に5つに分身するらしいですし、あつちの棍棒に至っては普通に振ると最大8人までミンチに、逆さに持って振るとあら不思議！ 味方の傷がみるみる回復するそうです』

「ああ、だから狩りの時に使くと獲物が仕留めやすかったんですね」

「これ、殴る以外に使えたのね」

『って、自分の武器も特性も知らずに使ってたんかい！』

というか、コイツが話したせいで逃走成功確率がガクンと減ったぞ

「さて、女性に失礼な事を言った罰は受けてもらっわよ」

「ついでに禁書を奪った後拘束しましょう。その後無理矢理知識を吐かせて処分します」

おい、今の発言は人道的にいいのか？

というか禁句タブーと言っならバクバク食うな

「さて」

「尋常に」

『覚悟!』

「さりげなくお前も混ぜってんじゃねえよ!」

そう言い本に拳を叩き付けながら部屋を飛び出――

「逃がしませ」

「ぶっ……飛べー」

『障壁展開!』

「グッ……ゴブハッ!」

――す前に天井を突き抜けて空高く吹っ飛ばされた

「リ、リンー?! 何してるんだ貴女は?!」

「だ、だってまさかあそこまで飛ぶとは思わなかったのよ!」

「軽く振っただけで、岩粉々に出来る物をフルスイングしたらそりや飛びますよ?! あの本が咄嗟に障壁張らなければ確実に死んでたましたよ?!」

ちなみに、吹き飛ばされた虎治は城から600m程離れた場所にある公園の砂場に突き刺さっていた

■ ■ ■

虎治が空から落ちた後、公園の周りには人が集まっていた
まあいきなり人が空から落ちて来たら誰でも気になるだろう

「おい、アイツ死んでないか？」

「誰か、コイツ引つ張らないか？」

「よし、抜くか」

そして、抜いてもらった虎治は……結構酷い事になっていた

「うおっ、こりゃ死んでるな。というか生きてたらこの世界の生物
じゃねえ」

「これ、骨砕けてるな。うっ、気持ち悪くなってきた」

「まだ若いだろうに、可哀想に」

「埋めるくらいしてやろっ」

その後、このままだと哀れだと思った方々に公園近くの森に埋めら
れたのだが……

もちろん、死んでいなかったたのである
障壁によって物理的なダメージは（こんな酷い状態だとしても） 2

0%程に軽減されていたのだ

特に腹部や頭部を重点的に守られていたので九死に一生を得る事が出来たのだ。まあ、手足が完全に砕け、血が結構な勢いで出てるので、このままなら確実に出血死だろう

ちなみに本は無傷だった（寅治を楯にした）

『マスター、いつまで寝てるんですか？ 私が頑張って地面掘り返したんですよ？ さつさと起きてくださいよ〜』

そして、魔法を使い土をどける事に成功していたが、結局死にかけてるのは変わっていない

『つて、んん？ もしかして結構ヤバかったりします？ え、マジで？ う、嘘だ嘘だそんなの嘘だ！ せ、せつかく目が覚めたのにまた封印されるのは嫌です！』

もちろん気絶している虎治に答える術などない
それにしても、こんな時でさえ主人より自分の心配とは……

『マスター?! 寝たら死にますよ?! いやもう寝てますけど。
とにかく死なれたら私も困るんですよー! だから死なないでくださいー! 主に私の為に! くつ、目覚めませんか。いや、分かっ
てましたけどね? こうなったら……救難信号ー!』

ちなみに救難信号とは魔導書が出す毒電……特殊な魔力を察知できる者（動物も含む）を呼ぶ不思議な力で、察知できる人がいないとまったく意味がない代物である。で、肝心な成功確率だが……1%を三桁も下回る程だ

『誰か来ますかね？ この際ウホツな方でもいいから来てくれませんかね』

来られて困るのは寅治だと言う事を忘れてはいけ
ないだが、幸いな事に（？）来たのは小さな女の子だった

『初めての成功幼女ですか！ まあ、今は猫の手も借りたいから深く
考えてはダメですね！ 属性とか需要とか。猫よりは役立ちます
…… よね？ と言う訳で、そこのお嬢さん、マスターを助けてく
れませんか？』

「……うん。ママ呼んでくるね」

その後、彼女の親により一命を取り留める事が出来た

だが、この子が寅治の運命を決定的に不幸にする原因の一つになる
事を、本人はまだ知らない

キャラ紹介

こまへんじやう

竜宮虎治

年齢19歳。身長178cm、体重63kg、座高88cm

髪と瞳は生まれつき綺麗な茶髪。線も細く、肌も白いため、後ろ姿なら女性と間違われる時もある。声がハスキーなのも間違われる原因になっている

ただし、正面から見ると、目付きが生まれつき悪く、髪の色さえもあり不良と思われる。よく不良に絡まれるのも不良と間違われる原因の一つ。ちなみに負け無し

ただし、本人はケンカ等は興味なく、静かに楽しく暮らしたがつて

趣味はとくにないが、菓子作りと、家事全般を得意としている。

特に裁縫と菓子作りはコンクールで金賞を獲れる程の腕前

上記の通り、趣味はないので暇な時は勉強をやっていたため成績は割りとよかった

高校までは山岳部に入っていた。本人はやりたくなかったが、友人に頭を下げられ仕方なく入部した。ただ、顧問や部員が変人ばかりだったため、山に行くが登らず、罌の作り方や食べれる野草、危険な野草等々の現代社会においてあまり重宝しない知識ばかり増えていった

好きなものは風呂と猫。嫌いなものは物騒な奴と調子に乗ってる奴。苦手なものは泣かれる事と誉められる事

意外にもじょ……【この情報は削除されました】

女性に対して興味が無いように見えるが、あるにはある。ただ、胸の大きさや容姿にあまり興味が無いだけである。本人としては、気が合う相手と付き合いたいと思っている

名前の由来はケンカが嫌いと言いながら何故か戦う事になる為、

【（本来海底にある）竜宮城が虎の治める場所（陸地）に建ってい

る」という矛盾のある名前にしたかったから

虎治「どうも。竜宮虎治です。まあ適当に頑張るんでよろしくー」

ラオブの書（通称）

作者名：アイン・ザームカイト

内容：略奪の魔術と奪い取った物を利用する為の呪文

遙か昔に作られた意思を持つ魔導書にして、記された魔術の凶悪さにより第一級封印指定された禁書

あまりの凶悪な性能のせいで前マスター死亡時に封印される。300年程封印されていたが竜宮虎治により封印が解かれ、現在は身の回りを面白可笑しく騒がせる事に全力を傾けている

マスターよりも自分を優先する事が多く、その度に虎治とケンカ（？）している

好きなものは笑い。嫌いなものは水や火等の自分を消せる物や気に食わない存在。苦手なものはマスターの脅し

こちらの世界の言葉を知っていたり、マンガ知識等も持つ謎の書物

自称性別女性

名前の由来は特になし。現在の名前は本のタイトルであり、まだ名前が無い為

ラオブの書（仮）『皆さん、あらゆる次元の中で最も美しく、気高く、そして博識な私にどけさせてくださ、あ、ちょっと、マスター?! 冗談なんで暖炉にダストシユートは止め、きやあああああ?!!』

アルカード・リオンハート、通称アル

ヒロイン1

年齢17歳。身長158cm、体重49kg、座高78cm。B
78/W58/H80

生まれつき白い髪に瞳は赤。肌は薄いピンク。先天的色素欠乏症である

その為、視力が若干弱く、日中は常に帽子と長袖の物を使用して
いるので彼女の素顔を知る者は少ない

階級は魔法使いで、特に攻撃魔法に優れている。その為、国を守る
騎士団（という名の自衛団）の隊長らしいことをさせられている。
体術もなかなかで、特に槍捌きは国で敵う者がいない程である。城
ではラビュリントの仕事の手伝いや、森での道具集め等の仕事をし
ている。ただし書類系統が全くダメなので森での仕事为主である

周りの評価は高いが、一人になったり、ラビュリントと共にいる
時はドジな面が前に出る。その為からかわれたりする事が多い。大
の甘いもの好きで、3食菓子を食べているが、太らないかなり不
安。その為太るといふ単語に過剰反応する。でも止められない

世界初、異世界から生物が移動したのを見た存在。そして発見そ
うそうパニックに陥り、脇腹に蹴りを叩き込み気絶させた

本来は優しい性格だが、仕事が終わると普段の彼女を知る者が信じ
られない程冷酷な判断をする

好きなものは甘い物と家族、友人。嫌いなものは仕事の時の自分
と怠惰に仕事をする者。苦手な物は母とラビュリント

実はひそかに人気があるが気付いていない。実は昔から英雄譚が
好きで、ピンチになった時助けてくれるような人と付き合いたいと
思っている。が、現実^{ドラキュラ}は厳しく、まず自分より強い男が少ない

名前の由来はD R A C U L A^{ドラキュラ}を反対から読んだA L U C A R T^{アルカード}と、
『夜明けのヴァンパイア』に出てくる吸血鬼、レスタト・ド・リオ
ンクルの名前を合わせ、ほんの少し変えただけ。別に吸血鬼では
ない

アル「あむあむ、やっぱり甘い物は最高ですね。って、なに勝手に食べてるんですか?! あ、ああ……わ、私のシュークリームが。リ、リン、今日という今日は許しませーん!」

ラビュリント・ヘクセン

ヒロイン2

年齢18歳。身長170?、体重57?、座高75?。B88/W60/86

肌は白く、砂金のような神が美しい女性。一番の特徴は色の違う瞳。右は紫で、左は碧である。コレは左目が生まれつき魔眼である為階級は女王だが、魔法は3種類しか使えない。5年程前にあった戦争で、国を守った実績と全女王が行方不明になった事で女王の称号を引き継ぐ事になった。が、女王としての自覚が足らず、仕事をしないで遊びまわったり誰にも言わず他所の国に遊びに行ったりとかなりフリーダムな生活を送っている

魔法はほとんど使えないが、見た目からは想像も出来ない程膂力があり、自分の体重の約7倍の重さのあるダグダの棍棒(約400?)を軽々と振るえる

実は仕事をやろうと思えば午前中に終わらせる事が出来る程有能だが、面倒なのでやらない

友人であるアルカードをいじめるのが趣味。たまにセクハラに近い事をする

性格はつかみどころが無く、のんびりとしている。ただ、DS疑惑やどこかずれた発言などでたまに周りを驚かせる

好きなものはアルカードと本。嫌いなものは仕事と真面目に何かをすること。苦手なものはアルカードの母と虫

実は胸が大きい事がコンプレックス。男性の視線が気になるらしい好きな男性がいるが、相手は妻子持ちなので諦めている

名前の由来はドイツ語で迷宮という意味のLabyrinthと、
魔女を意味するHexe^{ヘクセ}から付けた

リン「あ、アルばかり食べてずるいわ。もぐもぐ、うん。美味し
い♪ っであら、どうしたのアル？」

あれから2か月経った（前書き）

新キャラ登場します

あれから2か月経った

現在、俺は森の中にいる
食べれる野草を探しに来たのだ

「お、タンポポあった」

「トラ、そんなの食べれない」

「食える。食わず嫌いするな」

「ぷー」

で、現在隣にいるガキはリアマ・ディオス

無口かと思いきや、意外とよく喋るちびっこである。あと、間接的とはいえ命の恩人らしい

コイツは俺を見つけた後、医者を呼んで着てくれたそうだ。それどころか、孤児院の神父を説得して、俺の怪我が完治するまで院に置いてくれるように頼んでくれた。まあ、もう完治したので森に家を建てて今は過ごしてるんだが……

とにかく、今現在この世界で俺が一番信頼しているはリアマだと言っても過言ではない

にしても、あれ（ぶっ飛ばされて）からもう2か月か……色々あったなあ

■ ■ ■

『マスター、朝ですよ？ おはようございます。GOOD MORNING! Guten Morgen! Maidin mha ith!』

「……すう」

『ありや、これだけ騒いでも起きませんね。以外に寝つきの良い人なんですね』

「まあ、寝てる方が暴れられなくて治療がしやすいから楽なんだけどね」

「先生、治るの？」

「大丈夫だよ。こんな怪我先生が治すから、リアマちゃんはお外で遊んでおいで」

「うん、父様とお話ししてくる」

そついうと病院の近くにある協会に入っていた。彼女のいう父様とは神父の事なのだ

もつとも、いきなり町にやってきて、「神の声を届ける俺を讃えろ!」「神の名だど? 本当にスゲー奴にはそんな物は存在しねえんだよ!」「カジノつてのはよ、神が人に与えた唯一の奇跡なんだよ」等々の問題発言しかない生粋の変人だ

「ああ、そうだらオブさん。骨も繋がりましたし、傷跡も残りませんでしたか……いかんせん、骨の中身がスカスカなんですよ。やはり、もう少しは様子見ですね」

『そうですか。いやいや、助かりますよ。リンさんに吹き飛ばされた時はどうなる事かと』

「こつちも驚きましたよ。まるで女王陛下と訓練をした後の騎士の皆さんの怪我を更に酷くしたような怪我でしたからね」

『え、マジで? まさかあの人マスターという規格外の頑丈さを持つ方でさえ、障壁アリでこの大怪我を負うのに……騎士とはいえ一般人に向かって振るっているんですか?』

半分化け物扱いされてる虎治だが、今はまだ寝てるだろう。多分まあもし聞かれていたのなら

「誰が化け物だ無駄知識しか書いてないあらゆる世界で最も使えない魔導書様？」

そう、こんな感じで皮肉を言うだろう

『……え？ 起きてたんですか？』

「アレだけ騒げば誰でも起きるわ。にしても、魔法って凄いな。もう動けるじゃん」

「あ、待ちなさ」

医者言葉を無視して立ち上がろうとする

もちろん、怪我は治ってなんかたいない。骨はスカスカだし、血を出しすぎて貧血状態だ

まあそんな状態でいきなり立つたら立ち眩みするに決まっていた

「うつ？」

ふらつき、ベッドに座り込んでしまう

「あ、あれ？ 治ったんじゃないの？」

『馬鹿ですねマスター。あんな大怪我がすぐ治るとか考えが甘過ぎですよ。例えるなら、瓶いっぱい蜂蜜に角砂糖30個入れて一気飲みするくらいですかね。実際にやったら甘い通り越して痛いだけです』

「その前に糖分の取りすぎは体に悪いよ……まあ、確かに魔法を少し過信しすぎかもね」

くそ、座った時かなり痛かった……あ、今さうだけど痛いって事は、夢じゃないのか。まあ途中から気付いてたけど。だって腹減るし（すぐ収まったが）、本うざいし、女怖いし（物理的に）……

『ん、どうしました？ 顔が真っ青ですよ』

「い、いや……一瞬あの女共を思い出して。よく考えたらアレ殺人未遂だろ！ 何で太るって教えただけで殺され掛けなきゃいけないんだよ！」

『乙女（笑）の秘密でもあるじゃないですかね？ あと、マスターの知識云々言っただけから何かを知らうとしてたとか？』

もしまたあったとしてもアイツ等には絶対教えない事を誓った

「まあ、何があったかは分かりませんが……とりあえず今は休んでください。食事を持って来ますから待っていてください」

「助かります。治療までしていただき、本当にありがとうございます」

す」

「いえ、医者ですから」

そして先生が出ていた後、やはりラオブの書はギャーギャー騒ぎ始めた

『マスターがキモいです！ 普段言葉使いが悪い方が敬語とか、違和感が酷い事ありません！』

「礼儀知らずみたいに言うな！ 目上の方には最低限失礼のないよう気にするわっ！」

『なら私も敬ってくださいよ！ 私だって年上ですよ？！ ざっと300歳以上年上ですよ？！』

「なら腐れ」

『レディになんて事言うんですか？！』

「おまツ？！ 女のつもり？！」

此処来てから最も驚いた新事実だ

まあ声——頭に響くのを声といいのか分からないが——は割り高めだからもしかしたらと思った事もあったが、まさか本当に人格女だったのか

「び、びびった。今のはマジでびびった」

『失礼にも程がありますよ？！』

「本に性別があるとか思わねえよ！」

『あ、そっちですか。なら別にいいですよ。確かに本に性別があるとか思いませんよね。』とか言うとか思わないでくださいマスター！ その怪我悪化させるんで覚悟してくださいさ』

「こんにちは」

「家の娘をたぶらそうとする野郎はてめえかあ?!」

『グブフツ?!』

いきなり開いた扉から赤髪の子ビ（俺を見た瞬間前にいる神父の後ろに隠れた）と錆びた剣を帯刀している神父が現れた

しかも神父の方は現れてそうそうラオブの書を殴り飛ばしやがった

「食事を持って来ましたよ。どうぞ虎治さん」

「いやいや先生！ あの2人何？ 特に男の方向？ 説明できないと理解できないよ流石に?!」

「ん？ おお、リアマちゃん。よくこの遊び人を連れてこれたね」

「おい、誰が遊び人だ誰が？ 神の指示に従って、カジノに行ったりしてるだけだ」

そっついながら、懷から葉巻を取り出し火を付けようとする。が

「ん？ マッチがねえだと？」

「父様煙草ダメ」

「ってリアマ、煙草は父さんにとって神より大切なんだよ?!」

「ダメ」

「くそ、こうなったら魔法で」

「吸ったら話さないもん！」

「リ、リアマ？ 冗談だからな？ と、父さんがリアマの嫌な事する筈ないだろう？」

な、なんだこの2人？

漫才か？ それとも最近の神父はこんなおぼつかりなのか？

「ははは、流石のフレイも娘には勝てないみたいだな！」

「ふん、当たり前だ。俺は親バカだからな」

いやそれ自慢気に言うことか？

というか、どう見ても健康そうな人が病院に来てるんだ？

「……………」

「ん？ 何かようか」

「…………ぐすつ、ぐすつ」

「え、ちよつと何で泣くんだ？！」

狼狽していると、いきなり壁に叩き付けられた
物凄く痛い上に首を押さえ付けられているため息が出来ない

「てめえ…………家の娘を何泣かしてるんだ？！」

「し、しらな……………！」

「ぐすつ、ぐすつ」

「思いつきり泣いてるじゃねえか！」

「バカ！ お前が本気で押さえ付けたら？！」

「ごがぁ、あぁぁ……………かふ」

「あぁ？！」

息が出来ずに気絶した虎治を見て、ようやく泣き止んだリアマ

「父様、ぐすつ……そういうのダメなの」

「ま、待てリアマ？ 父さんはお前を守ろうと」

「ちなみにリアマちゃんは何で泣いたのかな？」

「お兄ちゃんの目が少し怖かったの。あと、元気になって嬉しかった」

「……つ、つまりアレか？ 父さん早とちりしちゃったのか？」

コクリと頭を縦に振られ、全身から嫌な汗を流すフレイ

「……よ、よし。リアマ、さっきの話しなんだが、今のを姉さんと母さんに言わなければこの才力、もといこの男を家に泊めるのを許そう」

「うん、分かった。言わない」

こんな事もあり、虎治は孤児院に泊まる事が出来るようになったのだ

■ ■ ■

はあ、その後も色々あったな……

もう本当に死ぬかと思つた事が何回もあった

恥辱を堪え忍んで笑顔で接客までした

そしてようやく完治し、働いた金で小さいとはいえ自分の家を持つ事が出来た

「ああ生きているって素晴らしい」

「どうしたのトラ？」

『いや、生きてて嬉しいんですよきつと。まったく情けないですね』

「黙れ阿呆！ そりゃ毎日のようにおっさんに剣の稽古という名の苛めをされたら誰だってこう思うわ！」

ちなみに稽古内容は全部実践的でとてもためになったのを此処に記しておく。ただし、習うより慣れる。そして盗めの精神なのでかなりヤバかった

「まあ、最近はおっさんの攻撃避けれるようになったし、フェイントに引つ掛かる事も少なくなった。次は一発当てるのが目標だな。

……まあそれはそうと、もうそろそろ日が落ちるし、帰るとするか」

「トラ」

「なんだ？」

「疲れた」

「よし、乗れ」

しゃがんで背中に乗せてやる。まあ軽いし、鍛練だと思えば山道で

も偉いと思わない

『主は子供に優しいですね』
「うっさい黙れ」

さて、家に帰ってタンポポハンバーグでも作ってやるか

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8221x/>

略奪者は魔法使いと共に

2011年11月17日20時48分発行